

古居みずえドキュメンタリー映画支援の会

通信

第16号 2024年12月発行

一日も早い停戦を願います

古居 みずえ (フォトジャーナリスト・映画監督)

昨年十月から一年と二か月が経ちました。これほど長く攻撃が続くとは思わず、ガザの人たちは立ち直るのもできないぐらい打ちのめされていることでしょう。人質となったイスラエルの人たち、そして家族の苦しみもあります。しかしながらイスラエルはハマス殲滅といながら、四万を超えるパレスチナの人たち、特に女性や子どもなどの民間人を殺し続けています。住むところも追われ、飲める水も食料もない中で、さらに爆弾が落とされるといふ人間としてあつてはいけないことが起こり続けています。

不思議なことに、アメリカをはじめイギリスもフランスなどの欧米諸国、そして日本も十分な抗議をせず、イスラエルの攻撃を本気で止めようとしていません。ガザの人たちの人権はどこにあるのかと思います。人権をないがしろにして何を優先させるといふのでしょうか？

私がお世話になったガザの人々、特に映画「ガーダ パレスチナの詩」に登場してくれたガーダの家族、夫の家族などどこにいるかもわかりません。映画の舞台になった Beit Hanoun、ハユニス難民キャンプなどはことごとく壊され、跡形もないそうです。

映画「ぼくたちは見た ガザ・サムニ家の子どもたち」の通訳ラミーさんは今回の攻撃で亡くなりました。子どもたちと私を繋いでくれた彼がいなくなり、子どもたちの消息は分かりません。

ニュースでわかったことはカナアーン君のお兄さんが半年もの長い間、刑務所に拘留され、拷問を受けていたことです。他の二人の兄弟もまだ帰って来ていないと言います。

ガザは緊張しているときが多く、大変でしたが、私は知り合った人々と会うのが楽しみでした。とてつもなく心優しい人たち、人間味があり、人を思いやる人たちです。その人たちがこんなにひどい目にあっているなんて、思うだけで胸が苦しくなります。

二〇〇八〇九年のイスラエル軍の侵攻で親や兄弟を失ったサムニ家の子どもたちは心に傷を負ったまま暮らしてきました。半年後に、生き残った親や兄弟が子どもたちを慰めるために海に連れて行きました。女性たちはお弁当を作りテントを張ってピクニック気分です。その時の子どもたちの喜びようは驚くほどで、海の方に一斉に走って海水と戯れていました。どの子も今までに見せたことのない嬉しそうな表情をしていたのを覚えています。ガザの海の夕陽の美しさも忘れられません。

一日も早く停戦し、命をこれ以上奪わないでください。(写真も筆者)



かつてガザの海の夕陽は美しかった

関心を持ち続けて忘れないこと

「戦火の中の子どもたち 戦火の中での援助活動」より

去る十月二十日(日)に行われたイベント「戦火の中の子どもたち 戦火の中での援助活動——映画と対談で考えるガザの今」では、「ぼくたちは見た」上映後に、ゲストに国境なき医師団の植田佳史さんをお招きして、古居みずえ監督との対談を行いました。その一部をご紹介します。

瓦礫しかない町に衝撃

古居 ガザに入られたのは初めてだと思うのですが、そのときの印象は？

植田 最初はケレム・シャローム(南東部)から入ったのですが、入るとすぐ瓦礫の山に



瓦礫の町と化したハンユニス © Ben Mi Ipas/MSF (2024年4月)

なっていて、もちろん報道の写真等でも状況については聞いていましたが、実際に入ったら、ちよつと家があるようなところはあつても、そこからずっと先まで瓦礫の山になつていて、想像以上に生活が完全に破壊されている状況に衝撃を受けました。

古居 家なんてほとんど残ってないのですか？ 難民キャンプだから家があるわけですが、それもありませんか？

植田 少しは人が住んでいそうなところもあるのですが、ほとんど瓦礫の山になつていて、所々テントを張っている人がいたり、半壊しているところにまだ人が住んでいるというような状況です。

古居 そこから、どこへいらつしやつたのですか？

植田 私たちの活動拠点は中部デールバラにあります。そこにベースの拠点と宿舎があつて、私のチームはアル・アクサ病院に行くチーム、あとハンユニス海岸沿いの診療所に行く医療スタッフもいました。私はデールバラの北に位置する地域で仮設病院の建設支援を行っていました。

古居 何人くらいでいらつしやつたのですか？

植田 私のように海外から派遣されている国際スタッフはだいたい十人。

古居 その中で日本人はお一人だけ？

植田 日本人は私のチームは私一人だけ、ほかの二チームには一人と二人いました。ナース、薬剤師、活動責任者の三人です。

古居 まず植田さんのお仕事としては、インフラの整備？ 仮設病院を先に作られたのですか？

植田 そうですね、最初に仮設病院の建設をやっていました。前任者のときから建設



植田 佳史(よしふみ)さん
国境なき医師団(MSF)の
ロジスティシャンとして今年
の9月までガザで活動。

所は人道エリアと呼ばれているところですが、四六時中、どこかで空爆の爆破音が鳴っていました。行った当初はハンユニスが激しく、八月半ば過ぎたころから中部デルバラハでも攻撃が激しくなり、二十四時間どこかで爆弾の音が鳴っていますし、監視用ドローンが飛ぶ音がずっと聞こえていましたね。

古居 ドロームは草刈り機のような耳障りな音がずっとして、聞いているだけで圧迫感



古居 みずえ さん
ジャーナリスト・映画監督

がものすごくありますよね。私は外に出たとき、自分が殺されるのではないかという恐怖心もあつたんですけども、危ない目にはありませんでしたか？

植田 私自身は、何等かのリスクに直面したことは、今回はなかったですね。オフィスから七百メートルのところまで空爆があり、爆発はありましたが、それを除けば直接的なリスクはありませんでした。ただ、私のチームでは、ハンユニスの対岸にある診療所で、ある日診療所の真上で攻撃ヘリが旋回し、離れたところ

ろにあるターゲットをヘリが攻撃し始めたのを目の当たりにしたスタッフがいたり、海岸通りを車で走っているときに、ドローンがMSFの車の数十メートル先の標的に攻撃を始めたこともあったので、巻き込まれる可能性はどこであつてもおかしくない状況です。

古居 植田さんに見せていただいた映像に、自分たちが死ぬかもしれないというメッセージを残して亡くなられた医師の方がいらつしやいましたが、MSFではどれくらいの方が亡くなられたのでしょうか？

植田 これまで医療関係者は六名ですね。
(二〇一三年十月七日〜二〇一四年十月)

建設した仮設病院を急遽オープン

古居 どういったところで寝泊まりされていたのですか？

植田 私が入ったときはデルバラハがまだ比較的安全だと言われていた時期だったので、攻撃をうけていない一軒家をMSFが借り上げて、私のチーム十名ほどと一緒に住んでいました。昨年十月に入ったチームや今年初めに入ったチームだと、北部からラファに避難したばかりで、野宿していた時期もあったようです。

古居 ロジスティシヤンのお仕事は、私には馴染みがなかったのですが、医療関係の補充とか、仮設病院を建てるお仕事をし



今年8月にオープンした仮設病院 ©MSF

ていらしたのですよね。活動中に病院の中に負傷者が人が担ぎ込まれたりはしなかったのですか？

植田 それはなかったです。私がガザに入ったのが七月二十九日、病院のオープンが八月二六日でした。アル・アクサ病院の近くに攻撃があつて、私たちの病院をオープンしないと医療状況がまずいということで急遽オープンしました。すでにアル・アクサ病院に入院していた患者さんの受け入れから始まったので、何等かの攻撃があつて緊急で受け入れないといけないという状況はオープンのタイミング的にも見ることはありませんでした。

ただアル・アクサ病院からきた方々は何等かの治療が必要だということで受け入れをしていました。

国際社会にどうアプローチしていくか

司会(齋藤) それでは古居さんのガザとの関わりについてお話しいただき、また、植田さんから、映画についてのコメント、また古居さんへの質問がありましたらお願いします。



司会・齋藤 真哉さん
映画「飯館村の母ちゃん」
制作支援の会副代表

古居 パレスチナには一九八八年に最初に行つて、半年ほどいました。その時はヨルダン川西岸とガザに半々位いましたが、映画をつくるようになってからは、ほとんどガザに行くようになりました。主に最初は写真を撮っていました、その後ビデオを使ってテレビ番組用の撮影などもやっていました。

二〇〇〇年になる前、一九九三〜四年ごろから「ガーダ」という一人の女性を通してガザ、パレスチナの状況を伝える映画をつくり始めました。

そして二〇〇〇年、第二次インティファダ(パレスチナ人による抵抗運動)が始まり、二〇〇六年にハマスがガザの政権をとつて、そのころからイスラエルがガザの封鎖をはじめ、私は封鎖の状況を記録したり、発表したりしていました。

そのあとできたのが映画「ぼくたちは見た」で、二〇〇八〜〇九年のイスラエルの侵攻で生き残った子どもたちの証言、メッセージを集めた映画です。そのような感じで映画を中心に今はやっています。

植田 私も今回初めてガザに入り、それ以前はガザ地区で度々、侵攻や武力衝突が起こっていたことは知っていました。が実際はどんなことが起こっているかは知りませんでした。今回、実際にガザの中に入つて、状況を見て、古居さんの映画も観て思ったのは、過去にも数十年にわたつて行われ続けてきて、映画のあとも二〇一四年、一八年、二二年、昨年十月からの今回の攻撃が始まる前にもいく度も繰り返されていくこと。映画のお子さんたち以外にも同じように家族を失つた子どもさんたちが数百人、数千単位でガザ地区にいらつしやるだろうし、映画の彼らは生き残つたけれども、逆に命を落とした子どもたちも数千人、数万人いる。同じことが繰り返されている状況、私たちは支援を提供する側ですけれども、それを止めるような力をもっているわけ

でもないですけれども、どうやって、国際社会、世論にアプローチしていくべきなのか改めて考えさせられました。

古居 今まで何回もイスラエルによる攻撃がありました。今回のものとは比べものにならない規模でした。サムニ家の子どもたちのような家族がたくさん増えて、そしてまたこのような目に遭う子どもたちがたくさん増えていくのはすごく残念です。

この責任は国際社会にあると思うんですね。こういう状況を七十六年も前から放置してきた。何度かは国連安保理でイスラエル非難決議にかけられたわけですが、アメリカが拒否権を使い、それが十数回にもわたつて採決されないままになっている。そういうことが一番大きな原因だと思います。国際社会がもつともつと責任をもつてやらないといけないと思うのです。

そんな中で私たちにこれから何ができるのか? 植田さんはどうお考えでしょうか?

植田 私は現地で



活動してきたのでガザについて関心があるけれども、実際に中で何が起こっているかわからない人に対し、積極的に情報発信して、ガザについて知ってもらうことがまずはじめとして絶対必要だと思えます。国民のなかでどうにかして停戦しないといけない、という世論が広まっていけば、政府としても何等かの形で動かざるを得なくなる。日本でもガザのためのデモなどの活動が増えていくと、最終的には停戦につながっていくかと思うので。私は現地に行つてどんな状況か知っているので、講演活動をしたり、友人に知ってもらおうのが私にできるせいぜいかなと思います。

司会 古居さんは昨年十月から緊急上映会を毎週のように行っていましたか、その中で手ごたえや課題はありますか？

古居 二か月くらいでしたが、映画の上映料を無料にして、緊急上映会の呼びかけをしました。昨年は多くの人が関心をもってくださり、ニュースが多かった影響もあったと思うのですが、百か所以上で上映会を開いていただきました。今までパレスチナは問題にされない、片隅に追いやられていた問題です。それが、急に取り上げられてたくさんの方たちに観ていただいたことはすごくよかったですと思います。

関心がそれでどれだけ広まったかは分からないですが、少なくともガザがクローズアッ



「ぼくたちは見た」に登場した子どもたち。今も無事に生きているのかとても心配だ。撮影・古居みずえ

プされてパレスチナに置かれている人々の状況が少しずつでも広まったことは大きいと思います。

ただ残念ながら、マスメディアが盛んに取り上げたのはその頃だけで、現地はますますひどい状況になっていくにもかかわらず、今はもう一日数分ニュースが流れるのがやっとです。メディアへの露出度でかなり人々の反応が違うので、もっとパレスチナの報道をしてほしいと思います。それと問題を知った人は広げていってほしい。映画を観た人は映画を広げていってほしい。自分自身で出来ることは何でもやっていってほしいと思います。

質疑応答

司会 (フロアへ)何か質問がございましたらどうぞ。

Q 古居さんに、映画のなかで子どもたちが家族を殺されて、家を壊され、全てを奪われた状況でも、誰一人としてイスラエルへの恨みや憎しみを語る人がいなかったと思うのですが、それに対してイスラエルの暴力、下劣な行いが大変対照的で、ガザの子どもたちから人間の尊厳を感じました。

一方、暴力にさらされ、家族に不幸が起きた子どもたちの中から、ハマスがイスラエルの侵略に対して徹底的に交戦を続ける立場を支持する人が出てくるのも自然だと思うのですが、それをどういう風に考えたらいいのでしょうか？

古居 パレスチナについて、メディアでは暴力の応酬とか憎悪の連鎖というような決まり文句があつて、そういう決まり文句でイメージが固められていると思うのです。実際にはパレスチナの人たちは人情豊かで人間的にも豊かな人たちだと思います。酷い目にあつたら必ずテロリストになるとか、そういう決めつけられることが多いのですが、そうではなく、彼ら自身強さを持つていて、追い詰められる人もいますが、そうでない人が多数だと思っんですね。



「暴力ではなく宗教や教育で抵抗したい」と語ったゼイナブ。
撮影・古居みずえ

映画の中でも、報復ではなく自分は暴力で
ない宗教や教育で抵抗したい、と言った女の
子がいきました。その方向にいくような、周りの
環境、支えてくれる人がいたり、また自分自身
の強さがあったのではないかと思えます。

植田 ガザで一緒に働いていた現地のスタ
ッフの大半は、紛争がおこり、家も破壊されて
家族も亡くなり、テントで暮らしている状況
です。それでも本当にイスラエルに対して直
接の憎悪を言う人はいなくて、皆が口を揃え
て言うのは、繰り返してはいけない、早く終わ
らせないといけない、ということでした。

もちろん、親や子どもを殺されたスタッフ
もいるので、心の底ではイスラエルへの憎し
みを間違いないと抱えているとは思いますが、
それよりも、これまで何十年続いている状況
を絶対どこかで終わらせないといけない、と
それ以上に思っているのではないかなと思
います。

Q 植田さんへ、この一年、ニュースや、S
NSで流れてくる映像は、廃墟やめっちゃめち
やになっているところばかりで、中には病院
も爆破されたというニュースをたくさん聞い
てきたので、今日話を聞いて、まだちゃんと医
療活動が続いていることにびっくりしたぐら
いです。実際にガザの中で病院の活動が、反対
にどれくらいできなくなっているのか、ガザ
の状況はMSFがまだ撤退しなくてもいいレ
ベルなんですか？

植田 ガザの医療機関の数でいうと、七〇
パーセント強ぐらいが医療活動を停止してい
るのが現実的な話です。(二〇二四年十月現在
私が帰国する前までは、大きな病院でいうと
ナセル、アル・アクサ、ヨーロッパ病院(EU
出資で建設された病院、ハンユニス、ラファ近
くにある)はまだ何とか活動を維持していま
した。ただ物資は慢性的に不足しているのは
間違いありません。

まだ活動している病院があるのは事実です
けれども、全体の病院の数から見ると、大半の
病院は活動できていないのが実際の状況です。
どこで撤退の決断をするのかは、現場にい
る責任者の判断が一番大きなところですが、
例えば私たちのオフィスに爆撃があったとな
れば、即撤退という決断になると思いますし、
または私たちの病院が直接攻撃を受けた場合な
ども同様だと思います。

撤退はチームごとに決断しますが、まだ直
接攻撃が起こっていないですし、私が建設に
携わった仮設病院でいうと、イスラエル側の
人道関係の調整をしているオフィスに、ここ
にMSFの仮設病院を建設しますと通報して、
イスラエル側からも許可、了承を得て、そのエ
リアは攻撃対象にしないという合意を得たう
えで進めています。基本的に私たちが活動し
ている場所自体は直接攻撃の対象にはならな
いということです。

ただ、直接攻撃はしなくても、例えば病院の
隣にハマスの構成員がテントを張っている
という情報を得たら、何の躊躇もなく爆撃す
るだろうし、そうなるとう総合的に判断して撤退
することになると思います。

Q 日本人として平和に寄与できることは
何かあるでしょうか？

古居 個人で何かできることという意味で
すか？ それぞれができる範囲でやるという
ことだと思います。何もデモにいくだけで
ない、自分がやれることをやる。私は映画をず
っとやりたいということとか、自分が、それぞ
れができる範囲のことをやっていくことでは
ないですかね。些細な事で変わらないかもし
れませんが、関わっていくこと、知っていくこ
と、広げていくことが平和にもつながってい
くのではないかと思います。

植田 平和に寄与するかどうか分かりませんが、映画の中でも、女の子が、世界が私たちが何を忘れてるんじゃないかという話がありました。関心を持ち続けて忘れない事が大きいと思います。

(テープ起こし：稲垣雅子 まとめ・文責：石井じゅん)



電気がなくろうそくの下で子どもに食事を与える父親。撮影／古居みずえ

《参加者の声》

◆現地の状況を聞くことが出来、とても勉強になった。普段から聞いている通りの状況である部分もあり、少し状況が違うなど感じる所もあったので、現場の生の声を聞くことは大切だと感じる。

◆現地から戻ったばかりの植田さんに古居さんがインタビュするという、あまりにぜいたくな布陣でビックリした。塩水シャワーのリアリーティなど、SNSで現地からの報告を見てもイマイチ伝わって来ていなかったものもわかってよかった。

◆植田さんの話は、実際にガザで活動されているので貴重なものでよかった。今回映画にも興味があったが、現在の状況を知りたかったので参加した。本当によかった。

◆「戦火の中での援助活動」というタイトルにひかれて参加したが、戦火の中での臨場感、緊張感のある具体的な話がほとんど聞けず、正直がっかりした。

◆いまだにジェノサイドが続いていることにもっと焦点を当ててほしかった。関心を持っていても、これまでのようにデモをしても、この一年変わらなかった。その事実を、この危機感をあまりこの場に感じられなかったことが気がかりだった。

《対談の司会を終えて》

齋藤 真哉

この度は専修大学国際コミュニケーション学部の長谷川宏教授のご協力により専修大学の校舎を利用させていただきました。

今回のイベントは、同じ古居監督を支援する、映画「飯館村の母ちゃん」制作支援の会も全面協力しての開催となりました。

広く・明るい会場で映画の上映が始まりました。十三年前のガザの様子が映し出されています。子どもたちの様子が映し出されると言葉が出なくなりました。

現在、この子どもたちはどのように暮らしているのでしょうか。そうだと、もう子どもでもありません。でも、彼らの苦難を想像すると大変胸が痛みます。では、その間、私たちは何をしていたのか、という問いが頭から離れません。

さて、対談が始まりました。淡々と語る植田さん。植田さんを気遣いつつも、現場でのリアルティを求める参加者。植田さんを見守る国境なき医師団日本の方々。そこで問われたのは、会場にいた誰もが「何をすべきか」「何かできるか」ということでした。しかし、その場では答えは出ませんでした。

このイベントが終わってから二か月が経ちますが、ガザの状況は改善されていません。しかし、諦めたら、私たちの負けです。その想いが皆さんの周りの人たちに通じないときは、このイベントを思い出してください。私たちは独りではありません。だから、私たちは負けません。

(映画「飯館村の母ちゃん」制作支援の会副代表)

♥ お待たせいたしました～！

「飯館村 ベこやの母ちゃん～それぞれの選択」 のDVDがついに完成しました！！

本編180分。飯館村の3人の母ちゃんの3つのストーリー、是非ご自宅でじっくりご覧ください。3章にわかれていますから、章ごとに観ていただくことも、一気に観ていただくこともできます。ご覧になって「よかった」と思われたら、ご友人、お知り合いにも是非お勧めください。



DVD 募金にご協力いただいた方々へ感謝申し上げます。

本体価格 3,700円+送料300円 です。

ライブラリー版は20,000円+送料300円

※支援の会に直接お申し込みの場合は本体のみの価格で販売いたします。

DVD 2枚組 (日本語版と英語字幕版 本編180分)

◎ 封入特典 ・ 予告編 ・ 作品解説リーフレット



★飯館村の母ちゃんシリーズ1作目

「飯館村の母ちゃん～土とともに」

DVDも好評発売中！！ 本編90分

本体価格3,000円+送料300円

ライブラリー版 20,000円+送料300円

どちらも

お申し込みは 映画「飯館村の母ちゃん」制作支援の会までメールでお願いいたします。

iitateka311☆bb-unext01.jp ☆を@に替えて送信してください。

ガザ 数字以上の悲劇

(古居みずえトキユメンタリー映画支援の会・代表)

北林 岳彦

ガザのすべてを破壊する攻撃

二〇二四年は「ぼくたちは見たガザ・サムニ家の子どもたち」の経験した悲惨な事件から十五年を数えました。あの時代だった彼女ら・彼らは、もう二十代半ばから三十代になろうとしているのです。

しかしガザ地区で数年おき起こる武力衝突・爆撃・侵攻は規模を拡大、その不均衡な軍事力の差も拡がり、特に二〇二三年秋からの空爆・侵攻は「集団懲罰」の指摘もあるように、民間人の被害住宅はおろか学校、病院、宗教施設、図書館やギャラリー、発電所や下水処理場、農地や畜舎、果ては墓地や歴史的建造物まで破壊、もはや「記憶」や「文化」も含め

たガザの全てを地上から一掃する勢いです。

ニュースでは知ることができないことがあります。何週間も食べるものがろくにないひもじさ、大人でさえ二十キロも三十キロも体重が減り、現地では多い糖尿病や泌尿器系疾患などの慢性病の悪化が深刻です。浄化・脱塩化



何度もイスラエルの攻撃を受けながらも、まだ日常があった頃のガザ。撮影・古居みずえ

されていない水を飲むことも健康に影響しています。ましてやろくに授乳できない赤児、成長期に栄養が摂れない子どもたちは将来が不安です。

数字にすら含まれない死者

もはや家族・親戚に犠牲者や重傷者を持たない人は殆どいません。今年初めの段階ですでに一万七千人とも一万九千人とも推測される子どもが、片親ないし両親を失っていました(ユニセフなどによる)。九百家族以上が全滅(十月初旬、ガザ地区保健省による)、「ガーダ パレスチナの詩」主人公ガーダ・アギールさんも三年十月、一挙に三十七人もの親族を失い、その後も次々に近い人たちが亡くなっているといえます。

正規軍同士が前線で戦う「戦争」とは全く異なる、大量の市民の追放と強制死の実態です。

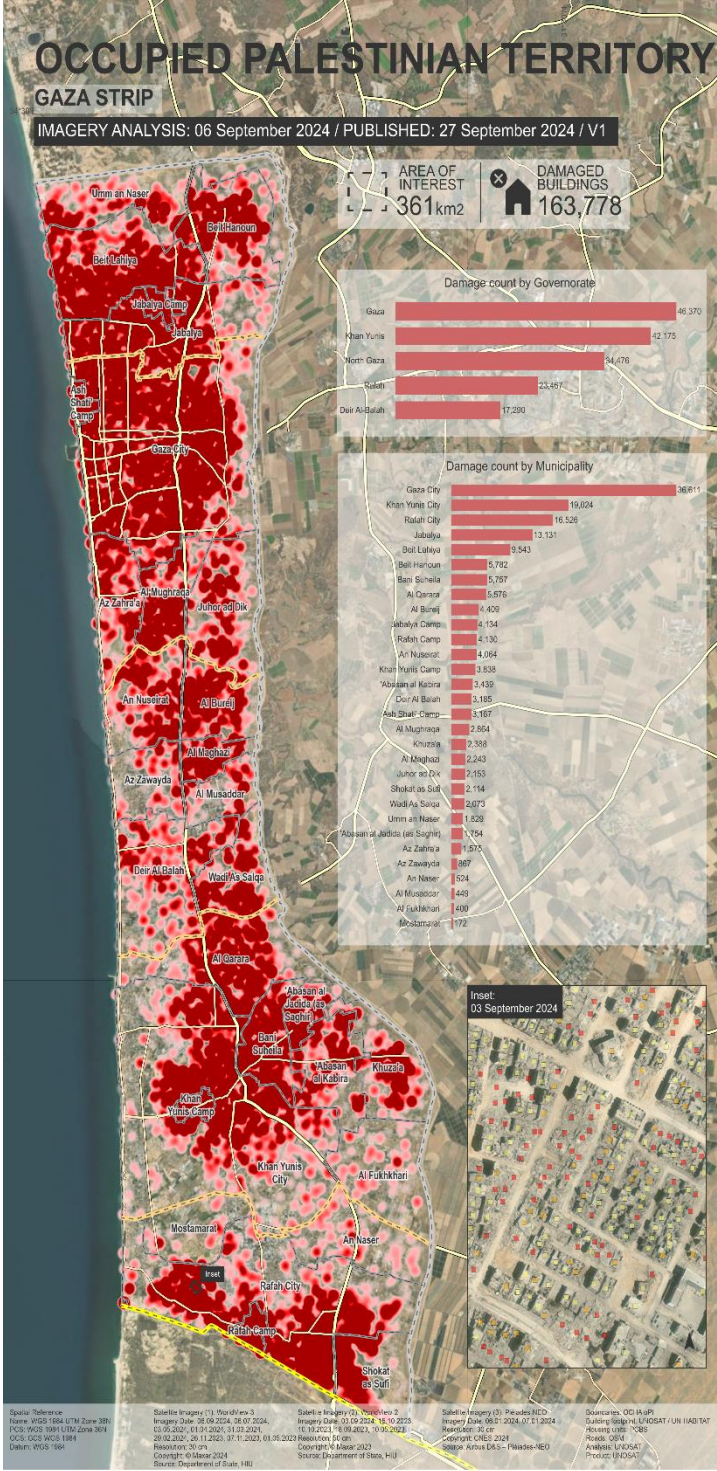
十二月初旬でガザ保健省が公表している死者数は四万四千五百人に達していますが、ここには



帰還の権利を求めての帰還の大行進が2018年ガザで行われたが、世界は全く注目しなかった。撮影・古居みずえ

治療を受けられず亡くなった病人、高齢者、餓死者は含まれません。希望を失って自死した人は尚更です。行方不明者を含めるとその数は三十三万人に達するかも知れないという推定も出ています(ガーディアン紙による)。

破壊された建物の下には、救出できなかった人びとが約一万人埋まっていると言われています。徹底的に破壊された街に入ると、遺体の腐臭が鼻を衝くといいま



ガザの破壊状況を示す地図。赤が濃い地域ほど破壊されている。北部のガザ市を中心にした地域は壊滅的被害を受けている。(2024年9月・国連衛星センター)

す。そして頭上では四六時中人や車の動きを監視しているドローン(無人機)のプロペラ音が沢山鳴り響いています。砲撃に加えて、このドローンの音が、人びとの精神を蝕んでいるのです。ガザを実験場にして開発した軍事・セキュリティ技術を、世界各国が買いつけています。

教育の機会を失った子どもたち

避難場所をまた追われて避難、もう持ち物どころか着の身着のまま、皮膚病を病み呼吸器疾患に

なつた子どもたち。むろんこの一年間学校で授業は受けていません。かけがえのない学びの機会を奪われているのです。避難所のテント村で自主的に寺子屋を始めている人もいます。しかし何十万という子らには対応できません。今は何よりも恒久停戦が必要です。しかし、本当の問題はそこから始まります。

イスラエル国会と政府はパレスチナ難民救済事業機関UNRWAの活動禁止法を制定、事実上パレスチナでの難民支援をで

きなくしました。喫緊に解決せねばパレスチナ人の社会・生活は崩壊します。

四肢切断など肉体的損傷がなくとも、二百万の人びとの精神ダメージは計り知れません。兵器による有害な環境汚染物質、瓦礫と粉塵、あるいは不発弾の散らばる中、愛する人の喪失を乗り越え、尊厳ある生活と笑顔を取り戻すには、並大抵でないエネルギーが求められます。それを支えるのは、こんな世界を許してしまった私たちの責任と自覚に他なりません。

★今のガザを知るための主なサイト★

ここでは日本語サイトに絞ってご紹介します。

- 国際機関のサイト
- UNRWA=パレスチナ難民救済事業機関
<https://www.unrwa.org/japan>
- ユニセフ= UNICEF・国連児童基金
<https://www.unicef.or.jp/kinkyu/gaza/>
- NGOのサイト
- パレスチナ子どものキャンペーン
<https://ccp-ngo.jp/>

- 国境なき医師団=MS F
[パレスチナ](#) | [活動ニュース](#) | [国境なき医師団](#)
- 通信社のサイト
- アル・ジャジーラ:パレスチナ・イスラエル紛争ページ (英文)
※パソコンの翻訳機能で日本語になります。
<https://www.aljazeera.com/tag/israel-palestine-conflict/>

ガザが危機の今 自主上映会を開いてください！

「ぼくたちは見た —ガザ・サムニ家の子どもたち—」



2008年12月～2009年1月に起きたイスラエルによるガザ攻撃。その時家族を失った子どもたちが心に深い傷を負いながらも懸命に生きる姿を追ったドキュメンタリー。子ども自身の言葉に耳を傾けてください。今はもっと多くの心身ともに苦しんでいる子どもたちがいるのです。

上映会のお申し込みは下記の古居みずえドキュメンタリー映画支援の会まで。

「ガーダ ～パレスチナの詩～」



ガザで生まれ育った一人の女性ガーダの生き方を12年にわたり記録したドキュメンタリー。古いアラブの因習に反発し、自分を貫くガーダ、日常生活の中にもイスラエルとの闘いがあり、母親となつてからは自身のルーツを探り、歴史を伝えるジャーナリストの道を歩むことを決意する。

上映会のお申し込みは下記東風まで。
<https://note.com/tofoofilms/n/n130948f1bba9>

★ガザ緊急募金にご協力ください！

集まった募金はガザに届けます。振込用紙にガザ緊急募金とお書きください。

古居みずえドキュメンタリー映画支援の会

<http://support-miz.thyme.jp/> メール: eigashiennokai@hotmail.co.jp FAX 03-3209-8336

郵便振替口座 00210-3-95264 口座名 「古居みずえ映画支援」

他の金融機関からご送金いただく場合は、ゆうちょ銀行 支店名 〇二九(漢数字)

当座 95264 「古居みずえ映画支援」宛にお願いいたします。